

第九編 社寺・史跡

第一章 神 社

一 飯富神社

所在地 大字三体堂字登迫六六一番地イ

祭 神 倉稻魂命 天照大神 天児屋根命

合祀社 (憶 神社)

祭 神 伊邪那岐命 伊邪那美命

例 祭 ・一月一日・一月七日・三月二十一日

・九月二十九日

(注) 三月二十一日の例祭には氏子青年たちで稲造行事が行われている。

夏越祭 ・七月二十九日・十一月二十三日

由緒についてはほとんどわからない。

飯富神社は、大字三体堂字登迫にある。社説には延喜(九〇一〜九三二年)〜応和(九六一〜九六三年)のころの建立であったという。現在、社記の類は何もない。

天正二年(一五七四)の棟札が昭和五十九年の改修の際

天井裏から発見された。貞享元年(一六八四)

の「三体堂在所

衆加精之人数」

という奉加帳

(板)が現存して

いる。藩政時代

は谷川氏が祠官

としてこれを管

理してきた。

なお、社殿の

後ろ左側に正徳

五年(一七一五)

の銘のある山神がある。これは今から二七六年前、三体堂領主、新納氏の時代に建立されたものと思われる。

山神の左側に「奉寄進」と書いてある小さい石塔が建っている。これは裏面に寛文六年(一六六六年、今から三二五年前)と書いてあるから、山神に寄進したものでなく飯富神社に寄進したものと思われる。



飯 富 神 社

二 八幡神社

また、神社の入り口に次の境内神社がある。

若宮神社 祭神 応神天皇 由緒不明
門守神社 祭神 八衢比古命 八衢比売命

所在地 大字万膳新改八〇六番地

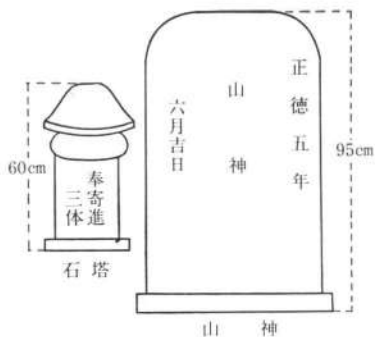
祭神 応神天皇 桑田大明神 六ノ宮大明神 兵

道御本尊

例祭 三月二十八日



石塔・山神



「万善家系図」にその由緒を次のように記している。

「建仁二年（一二〇二年）の比叻郡三百五拾町ノ内上三休堂ノ内、万膳越後守源弘章居住候節大平等申所へ源氏ノ氏神石清水正八幡宮ヲ崇奉ル由、古帳ニ有之候」建仁二年隅州桑原郡踊万膳に越後守源弘章と云う人居住の節肥後の国竜造寺隆信故ありて合戦に及び此の戦に勝利を得るが為に越後守遥々と京都に上り石清水正八幡宮の御本尊三休を勧請して帰り而して戦勝祈願を懸けたる上更に御神体を奉して隆信と合戦を致せし処武運強く遂に隆信の首を打取り引き揚げたり。故に越後守はその後八幡宮を氏神として祭りたる後天明二年（一七八二）頃に至り社を建て次て土

門守神社 右に同じ

緒不詳

若宮神社 祭神及び由

境内神社

神舞面（木製）二面

太鼓一張

神社宝物貴重品

豊祭 十一月十日

七夕祭 八月七日

御田植祭 六月十五日

地の名を取り大平八幡宮と符して祭りたり。之が即ち万幡八幡神社なり。

一氏神社正八幡大菩薩（万幡家の氏神）

山州石清水仁王五十六代清和天皇即位貞観二年己卯（八六〇）豊前国宇佐八幡を遷男山鳩峯号正八幡仁王十六代応仁天皇霊社也。



八 幡 神 社



伊 邪 那 岐 神 社

三 伊邪那岐神社

所在地
祭 神

大字下中津川字後迫四二七番地
伊邪那岐命 伊邪那美命 倉稻魂命
天日鷲命

例 祭 春祭 三月二十二日

お田植祭 六月十日

夏越祭 七月二十九日

方 祭 九月二十九日

霜月祭 十一月十日

七月二十九日の夏越祭には七歳の童子が真茅^{がや}を奉納し、これで茅の輪という輪を作り七歳児のお祓^{はら}いをした。なお、この行事は元龜二年（一五七一）から実施されているという。

1 由 緒

建立の年月不明、永享九年（一四三三）（七）、税所敦武が社殿新設の折の棟札、元龜二年（一五七一）社殿修営の棟札



仁王像

(地頭伊集院下野入道久通)があつたという。最初妙見崎に鎮座されていたが、その後、今の社地から南西約一〇九メートルのところに遷座になったが、大正十三年(一五八五)六月七日の夜の大雨で社殿が砂石に埋まったので現在地にうつしたという。藩政時代は上原氏が社司として管理した。

この神社は元妙見神社と呼ばれていたが、明治の初め廃仏毀釈、神仏分離の趣旨で伊邪那岐神社と称したものと思われる。

2 境内の仁王像

神社境内の入り口右側と左側に高さ各二メートルの巨

像(石造)が二体立っている。左側の像の裏側に寛文八年(一六六八)三月吉日の銘がある。像は彫りがあらく、いかめしい面相をした石像である。

四 堅たて神社

所在地 大字持松字前田一六番地

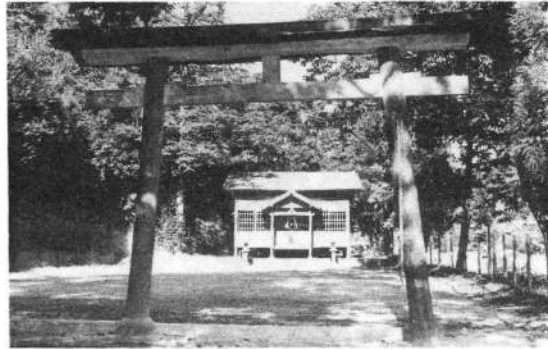
祭神 思比売命 市杵島比売命 天太玉命
高津比売命 天児屋根命 於加美姫命
於加美神

例祭 三月二十四日

1 由緒

霧島神宮末社として、天文二十一年(一五五二)北郷讃岐守忠相、尾張守忠親が造立したという棟札があったという。正徳二年(一七一二)、信徒の協力をもって改造し、宝暦十一年(一七六一)、氏子協力し再度改造した。これが現在の社宇である。維新後も氏子により少々の修理があつた(以上、霧島神宮保存明細帳写)。

天正四年八月島津義久公同義弘公より三原遠江殿を御使として当神社に豊後大友御退治の立願あらせられ、次後百



堅 神 社

六十九年怠なく御祭神料御供用あらせられ、後義久、義弘及び義久公御嫡女於加美姫の三人当所に御宿泊中の助勢を待ち堅神社の建立なり、於加美姫又深くこの神を信ぜられしを以て後当社に合祀するといふ。

明治四年四月、

管轄庁から持松村村社として定められ、その後昭和三年八月、氏子協力して本殿、拝殿を改築する。

2 境内神社

山神社 祭神 大山祇命 由緒不明

五 温泉神社

所在地 大字宿窪田安楽四一九一番地
祭 神 大穴牟遲神 少名毘古那神 伊弉册尊

配祀、国狭土神

例 祭

春、秋彼

岸入りの

翌日

1 由 緒

大永三年（一

五二三）に書か

れた社記には、

次のような意

味のことが記さ

れていたとい

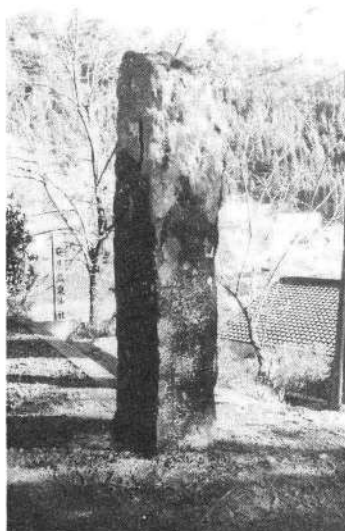
う。

すなわち、「康

治元年（一一四



温 泉 神 社

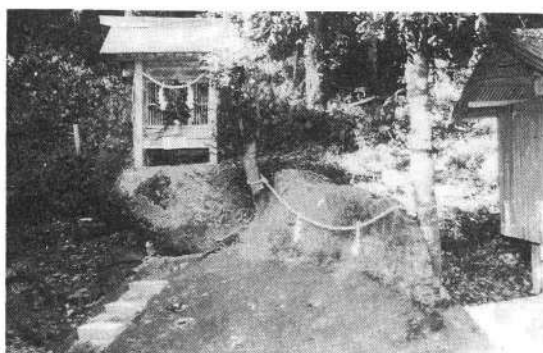


温泉神社石碑

(一) 一人の聖、熊野権現を笈^{おび}に入れ負い来りて、岩上に安し此地に一宿し、明日笈を拳^{こぶし}んとせしに動かずして重き事磐石の如し、時に神、潜に告て曰く此地に温泉出べし、安楽に居住を得つべしと。是において、即ち権現を岩上に建立す。今にその大岩、当社の右にあり、其後、聖本邑の女子に縁を結び夫婦と成てここに居住せしに、果して権現の冥助ありて温泉湧出す、因って安楽と名づけしとぞ、代宮司を奥村阿波と呼び、権現を守りし聖の子孫」という事になっていたようである。天正十年(一五八二)肝付彈正が社殿を修造した時の棟札が伝えられてきたという。ただ文化二年(一八〇五)建立の石

灯籠^{どうろう}形式の石碑があり、これには次のような碑文が記載されている。

桑原郡踊郷安楽之温泉之傍在宮社謂熊野大権現何年□人不
知造建也天正十午年肝付彈正謂復□□□□之而不詳審諸
国雖多所温泉出治病之効□□□□夫温泉之為効哉助氣
温体安血通滯□□□□宜暢皮膚明眼目弘上氣治諸病
脾□□□□内者可□之温泉之性不等一如是温泉氣味柔順而



安楽神社 お石さま



磨 崖 仏

無所咎障而治病甚速也以此考之必可依神之氣□□予文化二
乙丑暮秋來於此地浴溫泉功驗□証明也
亦其功能人々□所稱營溫泉之功驗記

其事刻石建石奉神前
于時文化二乙丑暮秋

西藩元蘭^{ちう}阜記

2 境内神社

伊勢神社（祭神、豊受須壳神）が鎮座する。

御神霊を奉じ、各氏子中を一年間巡駐祭祀した。大正十三年、境内に社殿を建て奉祀した。なお、祭祀儀式の折海中砂を御塩と称し秋分の日の祭典に神饌に供した。

3 お石さま

自然石五角形、疊四、五枚くらい大きな石で、由緒の聖が笈をおろした石と伝えられる。

4 磨崖仏

温泉神社の西方三〇メートルの山中に高さ七七センチメートルの磨崖仏（座像）がある。これは最近安栖武二が掘り出したものである。

六 和気神社

所在地 大字宿窪田三九八六ノ乙

祭神 和気清麻呂

和気清麻呂が神護景雲三年（七六九）、道鏡のために大隅国中津川すなわち牧園町下中津川稻積の里に流されたことは史実に明らかである。牧園町民並びに公の崇敬者間に遺跡顕彰及び和気神社創設の声が広く起こり、昭和八年十月、牧園村会において和気神社創設に関する案が議決され、翌九年には県議会において同案に関する建議案が満場一致で採択された。

昭和十二年四月、現在遺跡に建設されている和気祠堂、昭和十四年四月、肇国精神修養道場がいずれも公の

第1章 神社



和気神社

崇敬者の自発的
浄財によって竣
工。また、中津
川小学生によ
る、健児団、中
津川婦人会によ
る和気婦人会が
結成され、公の
精神を学ぶべ
く、和気祠堂、
道場に集い来る
者が多くなっ
た。

こうして度々

の陳情、請願の結果、ついに昭和十七年五月六日をもって、公の遺跡に、和気神社創建の許可が県知事から下り、昭和十八年十月十三日に地鎮祭が行われ、終戦後の二十年十一月二十五日に宏大、壮麗な社殿が完成し、翌二十一年三月十八日に鎮座祭が行われたのである。



聖神社

七聖神社

所在地 大字上中津川通山一〇五二番地

祭神 聖大明神

例祭 歳旦祭 一月一日

春分祭 三月二十一

日

夏越祭

七月二十九日

秋分祭

九月二十三日

新嘗祭

十一月二十三

日

由緒 不詳

神社貴重品

什器 一

銅鏡 一

棟板 一

大正四年現在

地に移転した。

八水天宮

甲辺の水天宮は、その神像（石像）の持っている宝索（ほうさく）が「まむし」に似ているので、マムシ除けの神として信じられて

いるが、元来は灌漑（かんがい）用水の守護神として祭られたものである。

所在地 大

字持松甲

辺

祭神

神像一体

例祭

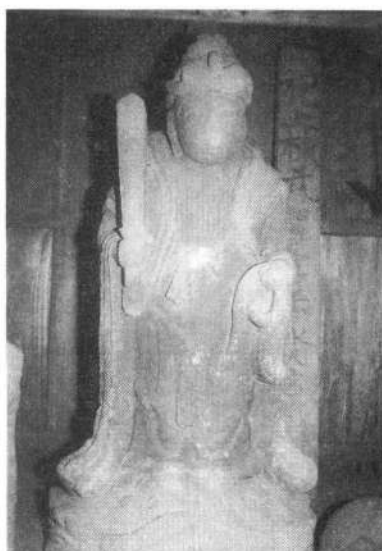
六月二十

八日（た

だし旧



水天宮（甲辺）



神像（轟水天宮）

（注） 以前は秋祭りも実施していた。
 由緒については、明確な記録は現存していない。
 また、この神像と同じ石像が町内轟木にもあり、轟木
 水天宮の祭神として祭られている。

（暦）

第二章 仏 閣

一 正 福 寺

所在地 大字宿窪田二二八六番地

名 称 高照山正福寺

宗 派 浄土真宗本願寺派（西本願寺）

創 立 正平年間（一三四七～五七の間）

開 基 懷良親王

浄土真宗帰属

第一世住職 慶山法師 以下血脈相統にて、第二世円智

第三世恵山 第四世不明 第五世廻照院恵嶽 第六世恵観

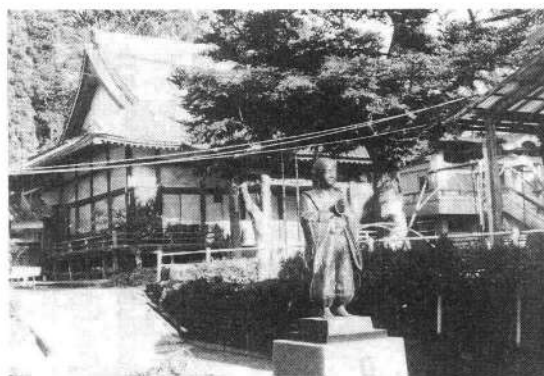
第七世得証院恵発 第八世智光院恵明 第九世霊超 第十

世遍照院智燈 第十一世浄照院靖之 第十二世一樹院尚道

と相承し現在第十三世禮之住職

正福寺縁起によると、

正福寺の縁起を案ずるに、後醍醐天皇第九皇子懷良親王、南朝の征西大將軍に任ぜられ、四国、薩摩を経て、肥



正 福 寺

後八代郡高田御所に在す時（正平二年＝一三四七～正平十二年＝一三五七）父帝（後醍醐＝建武四年＝一三三九、吉野にて崩御）の菩提を弔い給わんが為に、八代郡宮地村の勝地を卜し、悟真寺外十六ヶ寺の禅刹を創建し給う。本寺はその一にして、親王薨去（弘化三年＝一三八三）の後、南風競わず、従つて寺亦漸く衰う。降つて元龜天正の戦国

時代を経、寛文延宝の頃に至りては、唯僅かに正福寺の古跡を存するのみ、天和二年（一六八二）僧慶山、空しく古跡の煙滅せんことを慨き、浄土真宗に改めて再興を出願し、同年六月十一日政庁の許可を得たり（現存す）依て堂宇

を建立し、旧觀を改む。爾來嘉永二年に至り、(第九世靈超)七月十三日曉、祝融の災に罹りしを以て、更に再建復旧せしが、明治十年(第十世智燈代)西南の役の兵燹に遭い、堂宇古文書、為に烏有に帰せり。茲に於て第十世第十一世の二代に亘り、更に本堂、庫裡を再建(明治二十年)せしも、門徒僅少の爲維持困難を増し、遂に由諸ある古跡の廢滅を恐れ、熊本県当局の許可を乞い、明治三十七年五月十二日付許可を得て当村に移転し今日に至った。

又現在の寺院、境内地の沿革は、次の如し。

踊説教所創立願 明治十三年四月三日

本願寺別院受付許可 明治十三年四月十二日

説教所建設願

戸長 山口直左エ門受付同年四月三十日県令岩村通俊

間届 第六八一号

明治十三年五月七日付、を濫觴とする。

明治十四年、本山より方便法身尊影御下賜

同年三月二十五、六の両日、遷仏法要並開所式

その後数名の布教員を経て、明治三十三年より瀨本某布教員、三十五年、村井得忍開教使が駐在、明治三十六年二月十二日開教使、西藤靖之師着任、明治三十七年五月十二日、正福寺の寺号、及び住職がそのまま移転す。

明治四十三年、本堂及び書院完成

大正九年 宗祖聖人六百五十回忌厳修

昭和三年一月十四日、第十一世靖之遷化

同年四月六日 第十二世尚道住職拝命

昭和五十三年三月三十一日、第十二世引退

同年四月一日 第十三世禮之住職拝命

法宝物(主なもの)

一、蓮如上人御真筆名号本尊 一幅

一、阿弥陀如来立像 一鉢 正徳元年造

一、宗祖親鸞聖人御影一幅 寂如(一六六二—一七二五

間)上人御判

一、聖徳太子絵像 一幅 寂如上人御判付

一、七高僧連座御影 一幅 寂如上人御判付

一、蓮如 広如御連座御影 一幅 明如上人御判

これらはすべて八代正福寺から将来したもので、住職の私せるものではないが、西藤家と共に伝えられたものである。教義その他は宗派の定めるところ、教化組織は、仏青、仏婦、仏壯、また幼児保育の薰染保育園がある。

二 高 台 寺

所在地 大字高千穂三八六四ノ五
名 称 浄土真宗興正寺派高台寺
宗 派 親鸞聖人を宗祖と仰ぎ本山興正寺を中心と



高 台 寺

した宗教団体
法人

教 義

真宗教学教義
を伝道し教養
と人格の養成
につとめ説
教、講演、文
章伝道を主と
する。
布教には、恒
例、臨時、特殊
の三種がある。
恒例布教

定例により行ふ。青年会、婦人会、日曜学校など

。臨時布教

随 時

。特殊布教

学校、官公庁、会社、工場など

創立は、大正十一年三月二十六日。当時、奈良県宇智郡病合部村樫辻、専崇寺住職坂口昭円師が本願寺布教師として熊本県下の布教の途次にあった。そのついでに当霧島温泉地が紹介され、硫黄谷の堀切清彦の紹介で丸尾館主蔵前仁蔵（故人）を引き合わせられ、この地が開法不便の地の故をもって、ぜひここに寺を開基するよう要望された。その後の経過は次のようである。

。まず、信徒七九人をもって真宗興正寺派の説教所として認可

。大正十二年八月二十六日、霧島会館設立並びに落成式

。大正十三年三月十九日、霧島説教所認可

。大正十四年九月二十二日、高千穂説教所設立並びに落成式

。昭和十五年三月二十日、高千穂布教所認可

。昭和二十二年七月二十八日、高台寺寺号認可

。現在二代住職 坂口定照師

第三章 その他

一 創価学会九州研修道場

所在地 大字三休堂字鉢投一八二四―九

名称 創価学会九州研修道場

宗派 日蓮正宗（総本山、大石寺）

設立年月日 昭和四十七年九月六日

経過

九州研修道場は、全九州の会員の心からの願いと真心の結晶として、昭和四十六年十月一日に着工し、翌年八月二十三日に道場本部が完成、同年九月六日に落成式（開所、入仏式）を行っている。創価学会の研修道場の中では最も大きい研修道場である。同研修道場は、付近に石坂川が流れ、カシヤクスなどの林、豊かな緑が広がる景勝の地に建ち、晴天の日には錦江湾、桜島などの雄大な展望も楽しめる。また、敷地内には、数多くの動植物が自然と和合して生息し、まさに自然を呼吸する研修

道場との表現がピッタリである。

この霧島の大自然と見事に調和した同研修道場は、九州広布を担う法友の、信仰練磨の道場として、幾多の人材輩出の機能をフルに発揮してきた。なお、

昭和五十年十一

月に、創価学会創設の恩師、牧口常三郎初代会長の遺徳を後世永遠に顕彰するため、池田第三代会長の提案により「九州牧口記念館」が設置され、また、同五十三年八月には、会員待望の「九州広布記念館」が完成している。現在まで同研修道場を利用した会員は、およそ六九万人を数えるに至っている。生命の尊厳を訴える日蓮大



創価学会研修道場

上人の仏法を土壌としながら、新しい人間文化を築いていくという会員の願いが、この火の国の大地から幾重もの共感の輪となり、広がっていくことを心から期待し、今日も勇躍、前進して広布の活動に汗を流している。

施設の概要

主な施設は次のとおりである（完成順）。

- ① 道場本部
- ② 火の国道場
- ③ 牧口記念館
- ④ 青年道場
- ⑤ 旭日道場
- ⑥ 九州広布記念館

活動内容

創価学会の礼拝施設である同研修道場は、九州を中心にして、会員が本尊に勤行、唱題し、日蓮大聖人の仏法教義を研鑽し、信心の団結のきずなを強めるため、グループ単位で自主的に行う研修会の用に供することを主な目的としている。

第四章 史跡・名所

一 古 跡

(一) 南洲翁宿営の跡

牧園駅（現霧島西口駅）から東北約一〇〇メートルの所にある。その碑文に次のとおり記してあり、碑文の文字は、陸軍中将古海巖潮の書によるものである。



南洲翁宿営之跡

明治十年、薩軍利あらず進んで日洲長井村に集中す。官軍の攻撃甚だ急なり。翁八月十八日選兵約五百を以て払曉可愛嶽の嶮を突破し祝子川鹿川を経て二十一日三田井に進み夫より更に七山神門眼鏡村所上槻木小林を経て馬岡田に達し三十日横川に向う会々官軍の遮る所となる。依りて一隊を留めて之を扼せしめ転進して踊郷宿窪田に到り前田萬兵衛の家に宿す。此処即ち其の宅跡なり。時に官軍と字笠取に於て衝突し銃火を交ふる事数時間、翁は三十一日未明宿所の下金山川の浅瀬を渡り間道を経て蒲生に到り九月一日鹿児島に着し翌二日城山に入り以て二十四日に及べり。回顧すれば翁逝て五十年追慕の情転々禁する能はず。依つて記念の為碑を建て翁の宿営由来の大要を録し我村に於ける其の遺蹟を表す。大正十五年十二月建立、牧園村教育会。

(二) 笠取の戦跡

宿营地から東南約二キロメートルの所である（現在のひばりヶ丘住宅・自動車学校付近）。『笠取戦況』によれば、次のようにルポふうに記されている。

八月三十日午後二時頃、薩軍字笠取に向うや、官軍は今の笠取堀切東側老松木（今はなし）を中心とした右上に配

肥薩線隼人駅から北方へ約九キロメートル、同線霧島

(三) 和氣清麻呂公流謫の遺跡

火を焚き各陣地を守りたり。薩軍は笠取を突破するも、街道は国分に迂回せるを以て、翌三十一日午前三時頃当村荒武馮輔を先導とし、蒲生を経て鹿兒島に向へりという。



笠取戦跡

列す。薩軍は、市塚堀切の並木にたてを取り西北に展開し、西方の谷間を隔てて玆に戦闘は開始せられたり。時に午後二時過なり。兵数兩軍共に各々百人内外にして、何れも援兵の望なきを以て、断続的に戦闘し、双方共数名の負傷を出せり。遂に夜に入り休戦籌

西口駅から東南約八キロメートルの牧園町大字下中津川にあり、『和名抄』に大隅国桑原郡稻積とある地は、この地のことである。

清麻呂が、奸僧道鏡の怒りにふれて、大隅国に流されたことは史上有名な事実ではあるが、公配流の期間は、称徳天皇の神護景雲三年（七六九）から、光仁天皇の宝亀元年まで、約一年間のことである。しかし、里民の口伝もしだいに薄れ、かつ、文献も乏しいため、その遺跡は永く明らかにならなかった。英主島津斉彬はこれを嘆き、八田知紀に調査を命じてから、初めてその遺跡が世にあらわれたものである。



忠烈和氣公之碑



牧園町史跡案内

大である。この碑の付近には、照国公手植松の碑、及び義人稲積翁の碑がある。両碑とも大正十四年一月十六日、薩藩史研究会によって建設されたものである。

(四) 義人稲積翁の碑

奈良時代の末期、隅州旧桑原郡稻積里に義人あり。稻積

ここに
ある
「忠烈和氣公之碑」は、明治三十四年秋、子爵税所篤らの建設にかかるものであり、この地北方はるかに高千穂の霊峰に対し、近くには大飼の瀑布もあって、景観すこぶる



義人稲積翁之碑

翁と云う。当時、会々和氣公清麻呂の窺^{ぞん}せられてこの地に至るや、翁は公の忠烈を崇敬し、身の貧苦を忘れて奉仕する所あり。また、公と力をあわせて中津川の河伯祭の陋習を禁絶し、更に水利を興して灌漑に便し、以て衆庶を賑給しその流沢、今に尽きざるものあり。因て一碑を公の忠烈碑の傍に建て、この義人の遺跡を天下諸民に告ぐと云爾^{しん}。

(五) 熊襲穴居跡

宿窪田塩浸温泉の下流にある。その昔、熊襲穴居の跡といわれている。内部は岩石に囲まれ、数十室に分かれ、太平洋戦争の時は、付近の住民が避難居住したこと

もある。しかし、奥深く続き、その全部を踏査した者はいない。

また、古代の英雄日本武尊が、天皇の命令で熊襲を討ち取ったという武勇伝にまつわる洞窟でもある。日本武尊が熊襲の首領川上梟師（かわかみうし）を退治する時に、女装したところといわれ、またの名を嬢着の穴ともいう。岩壁にぼっかりと口を開いた洞窟は、大人でも立ったまま中に入ることが出来るほどの大きさである。

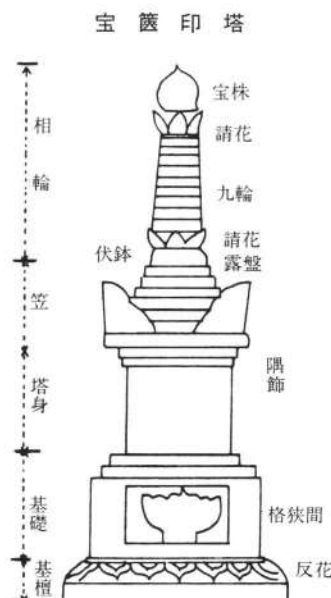
(六) 宝篋印塔（伝・曾我どん墓）

三体堂中福良七八四番地刀迫宅の上方、山の中腹に、昔から「曾我どん墓」と呼び伝えられてきた三基の石塔がある。

いわゆる曾我どん墓と伝えられてきた遺跡は、各地に残されており、母の発願により、日本の国々に建てられたとも伝えられるが、薩藩では、土風振作と孝行をすすめて、随所に建てられたともいわれている。しかし、おそらく盲僧琵琶（めいそうびば）の物語の中に、曾我物語が含まれて、人々の口にはのびたものと思われる。日向の国を根拠とした伊東氏は、祐経の子孫であるので、ここには曾我墓は

存在しない。しかし、これと競争した島津の領内には、その数が多いともいわれる。この墓を代々みとつてきた井手上氏は、伊東氏（曾我の一族）の出で、近在からのお参りもあつたという。

しかし、この石塔の形状は、明らかに宝篋印塔である。宝篋印塔としては形式は古いものである。鎌倉時代から室町時代にかけて、武士たちが明日をも知れない生命の不安におびえて、五輪塔や板碑宝塔などを建立して、来世の冥福を祈った石造建造物の一つであるから、これがたまたま曾我どんの墓と信じられ、伝えられてきたことは、どちらも中世武士の時代のものと考えられた



点で、偶然一致して面白。

この宝篋印塔を調査された古石塔の研究家黒田清光は、南北朝時代に、人吉から北隅に進出して活躍した相良の一族永留氏が、供養のために建てたものであると明言された（『文化牧園』第二号参考）。

（注）詳細については、中世の「牧園の古石塔」の項を参照のこと。

（七）踊城跡

「地理纂考」から引用して、説明にかえる。

踊城は、巢窪田村にあり、当城本丸を新城という。二の丸を中之丸といい、三の丸を内城という。

東の方は、野頭にして平地に接す塹の跡あり。南より西北は深谷にして、急流の山川、城下を繞る。即ち金山川なり。金山川は、横川邑と日当山邑との分界にして、両邑の地域西に接す。川水深くして渡るべからず。山上より仰ぎ望めば、石壁数十仞、直立して天険なり。土人の伝に、昔日敵軍来りて攻めしことありしに、陥る能はず。城中要害堅固なるを待み、金鼓を鳴らし、舞踊をなして楽しめたり。之より踊城といいしとぞ。古は横川氏、税所氏、北郷氏、北原氏等の所管となりて沿革一ならず。



踊 城 跡

永禄五年、北原氏の将白坂佐渡介、当城を以て島津大中公に降る。

（八）ツゴドン墓

牧園町宿窪田、田原のタツガ迫には墓地が多い。その入り口にある墓には、正面に「然叟清廓庵主」と記さ



ツゴドン墓

れ、「元和七年辛酉五月二十九日」と紀年がある。また、裏面には「正徳六年二月改之」と記され、右側面に「島津源七郎忠直」と刻されている。これは第十八代藩主島津義弘の弟家久の子で、重虎とも忠直ともいった人で、その晩年、少なくとも慶長十九年（一六一四）からその没年の元和七年（一六二一）まで、三代堂村（今の三休堂）など七・一四石の領主として、この地に隠棲した人の墓である。正徳六年（一七一六）は、その没後から八五年（約一〇〇年）を経過した年に当たり、この時はじめて現状に改められたらしく、そこに何らかの原因が介在したということが想像されよう。

「本藩人物誌」（県立図書館蔵）によれば、忠直は家久と樺山善久の女との間に、天正二年（一五七四）に生まれ、三歳の時東郷重尚の養子となった。重尚は、永禄十二年（一五六九）、川内の渋谷氏が島津氏に降った時に共に行動し、東郷・水引・湯田・京泊の地を訪れ、引き続き東郷の地を与えられた人である。

島津氏が霧島山の東にまで勢力を伸ばし、伊東氏と相對峙したのは、大永・天文年間以後久しかったが、最後にその根拠地を覆滅したのは天正五年（一五七七）である。その後、天正七年以後、家久が佐土原の守りを固めたので、忠直も父のもとに住み、同天正十五年、豊臣秀吉が来攻した時、既に父を失っていたが、東郷の城を守っていたのは、その老臣たちであった。秀吉の本軍は西九州を南下したが、別働の豊臣秀長の軍は、大分を経て南下した。家久はこれと交戦の間に毒殺され、その間、島津氏との和議がととのい、佐土原は依然島津氏の領有をみとめられた。

その後五年を経て起こった文禄の役には、兄豊久と共に朝鮮に渡り、従軍の途上、義弘の命によって島津氏に復帰、重虎を改めて忠直と名乗った。時に年一八歳。し

かし、由来病弱で、間もなく佐土原に帰り、姓も東郷に改めている。

時あたかも文禄検地が進捗し、その検地と終了後の新規土地配分に、主力を握っていた都城の伊集院忠棟のひごのもとに、文禄四年九月、菱刈本城の地五百七十余石が与えられ、続いて十二月には、宮崎県田尻村・山野などが加増され、合わせて一〇〇〇石を領した。

その後約一〇年、慶長五年の関ヶ原の合戦には、時代が急転直下した。兄豊久が討ち死にしたのに、忠直はその女に、喜入忠統の男をめあわせ、自らは慶長九年に引退した。三体堂に来たのはこの年ではないにせよ、慶長四年に伊集院忠棟が殺され、にわかには都城を中心として起こった庄内の乱が、彼にとって甚大な不利となったものと考えられる。

彼の住んだ佐土原は、伊集院忠棟の領国と境を接していた。彼は若くて、伊集院は老巧の士、薩藩きっての文治派の雄であり、豊臣中央との交渉の深い関係にあったのであるから、忠棟亡きあと、一向宗掃蕩の名目で、武断派に排斥されても、仕方のない立場にあったのである。

土地の人たちの伝説によれば、彼の邸に夜襲がかけら

れた際、白い鶏がときを告げて、彼の危急を救ってくれた。それから土地の人は、白い鶏を食べないといわれている。この伝説は、あるいは「かやかべ」の人たちから言い出された、霧島信仰から起こったものとも考えられるが、いずれにせよ、彼の身辺、一向宗の信仰に関係づけられることには変わりがない。

(九) オイッサマの墓

ツゴドン墓が入って、かなり離れた路傍に、オイッサマの墓と呼ばれる墓がある。墓に竿石は置かれずに、台石の上に板石に彫られた阿弥陀様の像が置かれている。陶製のすり鉢がかぶせられているので、その像は真新しい光明さを感じられる。この墓石の傍らには、次のような副碑が建てられ、ことの詳細を物語っている。原漢文を意識して紹介する。

花林長春大姉 父は島津中務大輔家久 母は樺山安芸守善久の女 永禄九年（一五六六）生。

はじめ根占大夫重張に嫁し、離別の後、質となり都に上る。洛にあること十四年。慶長五年郷に帰る。日州高岡、隅州本城等に移住し、後公命に依り



オイッサマの墓

隅州加治木に移る。元和七年四月二十二日卒。年五
六歳。本城氏輝澄謹誌

オイッサマは、前掲源七郎と同父母の姉弟で、戦国以来の宿敵として、島津氏に容易に降らなかった根占氏に嫁ぎ、若くして夫と離別、秀吉米攻の天正十五年、島津降伏の人質の一人として京洛に上った。二二歳の時である。

京にあること一四年、たまたま慶長五年に関ヶ原合戦が突発し、脱出、兵庫沖において戦い敗れて帰国途上の義弘に遭遇、手に手をとって日向細島に上陸、佐土原に帰った。慶長六年、佐土原は公領として没収さ

れたため、弟源七郎と共に知行所日向の田尻に移り、のち菱刈の本城に移り、慶長九年、三代堂村に移ったものと思われる。

このころのことと思われるが、京都から光明仏という僧が来たのを、この人は豊久であると称して、これが布教の手助けをしたということが、本城家文書の中に記されている。長春大姉は、上洛中に、当時一向宗と呼ばれた真宗に帰依していた結果、こうした事態が生まれてきたのであろうが、これはいたく藩のおとがめをこうむる結果となり、問題の光明仏は、当時刑場のあった鹿児島さつごの南林寺村洲崎において、斬首された。文書には彼を呼んで「気違いもの」と記している。このため質となっていた在洛の功績に対し、おくられていた知行五〇〇石は召し上げられ、義弘の住む加治木に移住させられた。おそらくその行動を逐一監視して、光明仏の再現を警戒したものであろう。

義弘が始良町の蟄居ちきから加治木に移ったのは、慶長十二年（一六〇七）のことであるから、このできごととそれ以後のことであろう。このことがあって、本城家の相続者に内定していた忠直の子徳丸（後の内蔵助忠頼）の

儀も、取り消されているから、オイッサマと同時に、忠直も処罰の対象となっていたものと思われる。

薩藩で、一向宗の禁止が始まった原因については諸説あり、秀吉来攻の時に、その軍を誘導したのが一向宗の僧侶であったためともいわれている。

しかし、慶長二年に朝鮮遠征におもむくに当たり、隈之城役人あてに、義弘が書き残した掟の中に、「一、一向宗の儀、先祖以来御禁制の儀に候の条、かの宗体になり候もの、曲事たるべきこと」とあって、その由来を記しており、このころに始まったものと思われる。ここにいう「祖法」も、この年作られた「日新菩薩記」の中に収められている、「魔の所為か 天眼 おがみ法華宗 一向宗に 数寄の小座敷」の歌であるといわれている。

ここにいる「天眼おがみ」はキリスト教のことである。慶長七年、徳川幕府の安堵を受け、島津氏が急いで藩制を整えることとなったため、この義弘時代の政治体制は、寛永年間に幕府の切支丹対策が進み、鎖国という大方針がとられるにつれて、薩藩では一向宗禁止の方針もいよいよ固定し、これが検断のためには、キリシタンと並んで、「宗門手札」を発行することとなった。この

「札改め」は、五年ごとに行われる掟で、ほぼ二五〇年、明治九年まで続いた。信徒であることが発覚すれば、番役に呼び出され、厳重な拷問を受け、血判の誓詞を提出させられる習わしになっていた。

こうした藩の方針の固定化に伴い、オイッサマの葬儀も、正規のものが遠慮させられ、没後二〇二年にして、ようやく事の進められた次第が伺われるが、それからあらぬか、先ごろ長春大姉の位牌が薩摩郡鶴田町において発見され、事の次第を如実に物語っているかに思われる。

二 古社寺の跡

(一) 霧島神社（さんかく堂）

三体堂中郡にあり、昔は老樹が茂り、中に三角堂と称する堂があったという。今は個人有の土地となり、山は樹木が伐採されて、ほとんど腐食した鉄鉾一本が残されている。古老の言によれば、当堂は霧島神宮の祭神である瓊々杵尊の御母命を奉祀したところという。

祠堂は朽ち果てて、その形状もなくなっていたが、昭

和五十五年四月、区民一同の浄財によって再建された。

(二) 檣神社跡

三体堂飯富神社の南、約三〇〇メートルのところに檣橋がある。この辺は、昔から老樹が茂り、林間に檣神社があったが、無格社の故をもって、廃社として飯富神社



霧島神社（さんかく堂）

に合祀され、社跡は田に開墾された。その当時は、老樹の根周辺から多くの素焼きの土器が出土したが、当時はそれが何であるかを知る者もなく、子供の玩具として与え、今は一片もないという。

三 仏閣の跡

(一) 真福院の跡

慈峯山長久寺真福院と称し、今の牧園小学校東隣にあった本府大乘院の末で、真言宗。本尊聖観音（座像長六寸日州佐土原周防入道作）十一面観音新作両軀を安置する。開山忠実法印（遷化年月伝不詳）、松齡公の開基との言い伝えがある。踊郷の祈願所である。

(二) 東光寺の跡

日峯山東光寺といった。今の牧園小学校の南隣にあった。

「本府福昌寺の末にして曹洞宗なり、本尊薬師如来（座像二尺二寸定朝作文禄四年乙未九月安置）を安し、

開山を喜冠和尚（福昌寺十六世）という。開基年月不詳、当邑の菩提所なり。寺内に眞明公の御霊牌あり。施主の故なり」と記してある。

(三) 釈迦堂の跡

三体堂川畑氏宅付近にあり。仏寺で、釈迦如来の尊像を安置し、庭前にはエノキの大木が茂っていたという。明治初年の廃仏毀釈の折、ここで仏像仏具を集めて焼いたといわれる。この寺についた田を釈迦田といって、その名が今に残っている。

(四) 観音堂の跡

飯富神社の一の鳥居前方高地にある。由緒はつまびらかでない。こと、三角堂・釈迦堂を合わせて三体堂というのが村名の由来という。また、一説には、三体堂とは飯富神社に三体の神を祭るゆえ、その名が出たという。

(五) 音川山玄龍寺跡

三体堂榎橋の東方の山中にあったという。今はその跡

に三体堂村旧領主新納氏の墓地がある。一墓碑に、「延宝年間新納市正久珍大口より来り、踊三体堂村領主となりし」とある。のち、山崩れのため堂ヶ平に移したという。

(六) 久習山一雄院跡

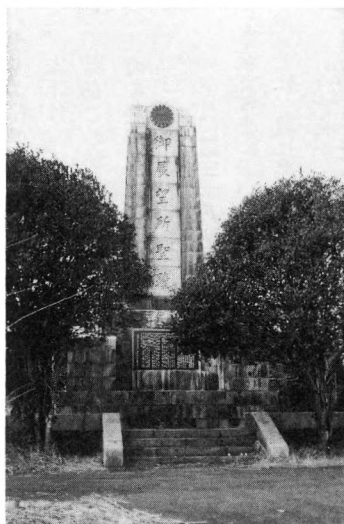
上中津川板越の坂上にあったという。

四 御展望所聖蹟と全国植樹祭跡

牧園町高千穂の町営牧場の一角に、御展望所聖蹟記念塔が建立されている。次にその記念塔碑文を掲げる。

鹿兒島種馬所ハ明治二十九年五月創設セル九州種馬牧場ノ後ヲ承ケ同四十年八月改メ称ス其地原野広闊背ニ高千穂連峰列峙シテ前ニ錦江灣ヲ隔テ海門桜島諸山ト対シ煙山浩渺風光雄麗ヲ極ム

昭和十年十一月聖上陛下鹿兒島宮崎二県ニ於ケル特別大演習御統監ノ後地方行幸ニ移ラセラレ十六日当所ニ行幸シ具サニ業務ヲ覧サセ給ヒ次テ便殿ヨリ御愛馬白雪ヲ丘上ニ進メ江山ノ勝ヲ翫シ更ニ玉鞭ヲ掲ケテ域内ヲ馳驅シ実況ヲ巡



御展望所聖蹟記念塔

視シ給フコト多時ニ及フ
 此日天氣爽朗四望豁然龍顏特ニ愉色ヲ拝シ奉ル由來薩隅日
 三州ハ牧野ニ富ミ書紀ニ日向ノ駒ノ御製アリ良馬ノ産史伝
 ニ証スヘキモノ少カラス天文中島津貴久あらひや馬ヲ輸入
 シ放牧孳殖具改善ヲ加ヘ勁駿威容ヲ具フト称ス恭シク惟ル
 ニ陛下親シク辺陲ニ幸シ牧場ニ臨御シ給フハ洵ニ空前ノ威
 儀ニシテ恩榮ノ大ナル感激措ク能ハサル所ナリ
 夫レ国民精神ノ作興ハ報本反始ノ誠ニ原ツキ国体ノ明徴ハ
 皇國肇基ノ源ニ溯ラセル可カラス今ヤ時運ノ艱ハ民風ノ振
 張ヲ促シ国防ノ急ハ馬政ノ發展ヲ要ス宜シク馬産ノ拡充ヲ
 図リ国勢ノ興隆ニ資スヘシ
 況ヤ皇祖發祥ノ地古來兵馬ノ精強諸州ニ冠タルニ於テヲヤ



杉苗をお手植えの昭和天皇

(「広報まきぞの」No. 289・昭和59年6月号から)

冀ハクハ益祖業ヲ継キ孜孜事ニ従ヒ以テ叡旨ノ万一二答ヘ
 奉ランコトヲ茲ニ同志相謀リ塔ヲ聖蹟ニ建テ以テ報效ノ衷
 ヲ表スト云爾
 昭和十一年十一月十六日
 行幸記念事業期成会
 〔参考〕 第三十五回全国植樹祭
 昭和五十九年五月二十日、五月晴れのもと、自然教育
 の森で天皇陛下をお迎えして、県内外から一万二〇〇〇

人余りが出席して「第三十五回全国植樹祭」が行われた。陛下は、十一時三十分杉の苗木三本をお手植えされた。現在この杉が約三メートルに成長し、今は亡き陛下の往時の姿がしのばれる。

天皇陛下のおことは

本日、第三十五回全国植樹祭に臨み、ここ霧島山麓自然教育の森において、親しく諸君と会し、共に植樹を行うことは、誠に喜びに堪えません。

今大会が「二十一世紀へつなごう輝くみどり」を主題にして、関係者の努力により、このように盛大に行われることを、深く満足に思います。

植樹は、森林資源の確保をはじめ、水源のかん養、災害の防止、生活環境の向上のためにますます重要性を加えてきています。

関係者一同は今後とも積極的に植樹を推進し、より豊かな国土の建設に寄与するよう切に希望します。

五 戦没者慰霊碑

太平洋戦争関係戦没者の慰霊碑を建たいという遺族の要望により、昭和三十一年の暮れ、慰霊碑建設委員会の

が設けられた。

以来、町内各戸

からの募金によ

って、昭和三十

二年十月十日に

竣工した。雄大

な霧島連峰が目

のあたり望んで

きる町公民館前

の高台に建つ。

これと同時に西

南の役・日清・

日露戦争招魂碑

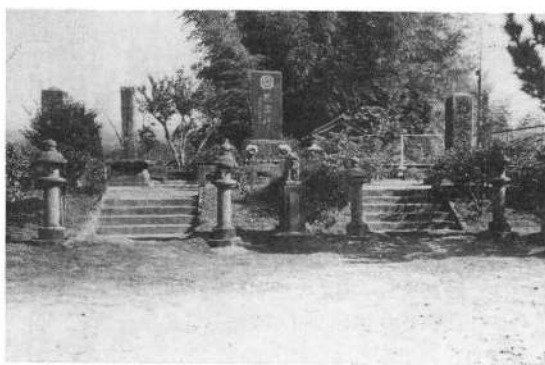
も、安宕山から

ここへ移され、

盛大な除幕式が行われた。以後毎年慰霊祭が行われている。

六 延命地藏尊（高千穂）

林田ホテルから約一キロメートル高千穂河原への道路



戦没者慰霊碑

を登ると、左手に高さ約二メートルの地藏尊（石仏）が建立されている。この地藏尊は土地の人々の幸せを希って、浄土真宗、高台寺（高千穂）が昭和七年三月、鹿児島市の石工、桜井秀太郎の手によって造られた石仏を建てたものである。



延命地藏尊

七 犬飼のエドヒガン

エドヒガンは、本県吉松町栗野岳の北側斜面、標高七〇〇メートルの自生地が、わが国における自生南限地として、国の天然記念物に指定されている（大正十二年三

月）。

犬飼の滝下流約四〇〇メートルの地点にあるエドヒガンは、樹齢は一〇〇年を超えると推定されるが、樹勢はなお盛んである。「田代善太郎日記」に記されているものの一つは、この木であろう。「同日記」には、和気にも自生したとあるが、和気神社参道入り口に一本ある。開花の時期は三月中・下旬である。



エドヒガン（犬飼）